

利根川・吉野川・筑後川の三大河川交流の歴史的意義と展開

A Historical Meaning and Development of exchange and relationship among the Three Big Rivers which are Tone, Yoshino and Chikugo River in Japan

高山 啓子

Keiko TAKAYAMA

1. はじめに

平成24年に締結された日本三大河川の養子縁組は、流域の住民相互の交流による環境保全や減災を目指して発足した事業である。

坂東太郎、筑紫次郎、四国三郎という愛称で呼ばれるこれらの河川流域間の連携は、洪水、氾濫など幾多の大災害に見舞われながらも、人間に多くの恩恵をもたらす川と人との共生の知恵として新たな展開が期待されている。本州、四国、九州にまたがる。この取り組みが、将来的にどのように発展していくかは、わが国における市民主体の河川文化の育成と環境保全、地域振興とも深く関わっていると考えられる。

以下、3つの河川水系とその相互の関わりに関する歴史を紐解きつつ、これらの水系に関わる人々と地域環境創出の今後の可能性について考えて行きたい。

2. 日本のフロンティアとしての利根川水系

別名坂東太郎と呼ばれる利根川は、群馬県の大水上山山頂を起点として、銚子市の北東端で太平洋に注ぐ首都圏最大の水系である。北は群馬、及び長野の一部と栃木県、埼玉県、茨城県、南は東京都、千葉県中北部地域に及ぶ日本最大の流域面積(16,800km²)を持つ(図-1)。

利根川水系の水は、首都圏内のおよそ3050万人の飲料水として、さらに農業、工業、発電など多方面に利用されている。また、房総半島中南部など利根川流域以外の地域にまで用水路により供給され、農業用水として利用されている(註1)。

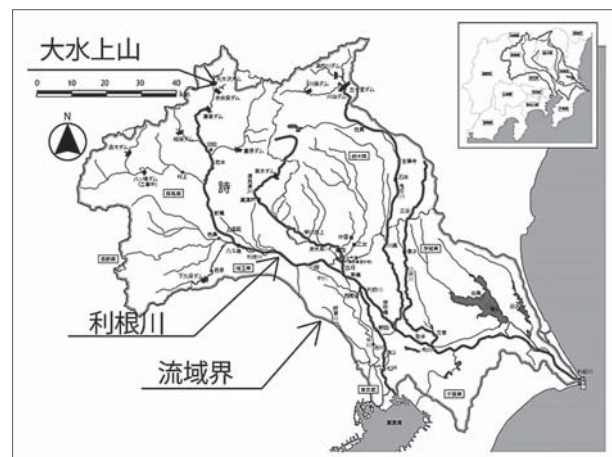


図-1 利根川流域図

また、利根川は、水利用だけでなく主要な交通、輸送路としても使われてきた。

しかし、明治期に入ると各河川流域で鉄道が建設され、人や物資の輸送の多くが鉄道輸送に移行した。それでもなお、昭和40年代初頭まで、利根川水系は、関東圏内はもとより東北、北陸地方と関東圏を結ぶ重要な交通路であり、多くの人とモノが行き交っていた。

しかし、上流部でのダム建設や堰堤の設置により、河川を輸送路として利用することが困難になった。さらに、昭和40年代に入ると、トラックの普及が船による輸送に取って代わるようになり、河川を利用した物流や交通は大きく後退した。それに伴って、河川を介した人・物の交流が昭和40年代以降ほとんど影を潜めてしまった。

近年、工業化や、首都圏への人口集中による水環境問題や水害対策の一環として流域の市民環境保全団体の連携が進んできている(註2)。また、その動きは1つの河川流域にとどまらず、異なる流域間の連携へと発展しつつある。利根川、吉野川、筑後川の3つの河川流域の連

連絡先：高山啓子 ktakayama@cis.ac.jp

千葉科学大学危機管理学部動物危機管理学科

Department of Animal Risk Management, Faculty of Risk and Crisis Management, Chiba Institute of Science

(2016年9月30日受付, 2017年1月13日受理)

携が、平成24年(2012年)に始まり、各流域の住民が他の河川流域を訪問して相互に情報を交換し、互いの交流と理解を深める活動が始まった(註3)。

しかし、振り返ってみると、かつて日本の主要な交通手段が舟運であった時代には、組織だったものではなかったが、実は様々な形で、これらの流域間の交流活動が行われていた点に注目したい。

3. 阿波忌部らよる吉野川と利根川の交流ルート

今から1300年ほど前、四国の吉野川流域(写真1)から房総半島南部を経て銚子、佐原方面、更に北へ定住域を広げた人々の集団が存在した。古代日本の原型を作った大和朝廷、そして日本を形成した天皇家とこれを支える忌部氏は、その代表格であると言っても過言ではないであろう。



写真1 吉野川(中流部)

忌部氏とは、阿波地方(現在の徳島県)に弥生時代(3世紀頃)に移住した一族で、粟、ヒエ、米、麦、大豆などの穀物の種子と栽培方法、鉄器、焼き物、漆の技術、麻、カジ(木綿)、及び絹の生産に欠かせない麻・桑、カジの種子や苗の栽培技術、さらには造船や航海技術を持っていたと考えられている。忌部氏はこれらの資源と技術を携えて吉野川流域から黒潮に乗って紀州、尾張、東海、伊豆半島、三浦半島へと定住域を拡大していった(註4)。平安時代初期には安房の国、即ち現在の房総半島南部、館山付近の開拓に着手してここを足掛かりに領地を拡大し、安房の国を建設した。その足跡は、安房一宮の安房神社(写真2)や州宮神社など忌部氏ゆかりの神社や遺跡に残されている。

安房地方(房総半島南部)から利根川流域への麻の伝播は、麻を意味する「さ・ふさ」を受け継いだ地域名、あるいは都市名即ち匝瑳(そうさ)郡、匝瑳市の地名として今も受け継がれ房総半島をはじめ、関東一帯と吉野川の交流の歴史を語っている。

一方で、彼らは余剰生産物を他地域へ運び必要な他の物資と交換しながら地域の基盤整備や生活水準向上を図

っていったと見られる。また、阿波にいた^{あずみぞく}安曇族(註5)のような忌部以外の職能集団も忌部氏とともに黒潮の流れに乗って東あるいは西へと居住地を拡大していったとみられる。吉野川流域で勢力を拡大した阿波忌部氏は、平安時代初期(8世紀初頭)には天皇家と姻戚関係にあった。忌部の孫であり天皇家の王子でもあった天ノ富ノ命(アメノトミノミコト)は天皇の命を受けて安房への移住計画を立て、一族を率いて、船団を組み阿波を出発した³⁾。

そして紀伊半島、伊豆半島を経由した後、三浦半島に既に築かれていた忌部氏の拠点で装備を整えたのち、房総半島南端の館山湾に上陸し、南房総一帯を開拓していった旨が平安時代の書物(古語拾遺)(註6)に記されている。

その後忌部一族は、房総半島を北上して新たな定住地を次々と形成しつつ領域を拡大して行ったとみられている。



図-2 黒潮を介した三大河川間の交流模式図



写真2 安房一ノ宮の安房神社

領土の拡大に伴って大和王国は徐々に実質的な支配力を身につけていき、やがて日本国へと変貌を遂げていく。

房総半島と北関東との境目に当たる利根川沿いには、忌部氏ゆかりの神社が多くみられる。例えば、茨城県阿波町にある大杉神社は「アンバサマ」の愛称で、古くから人々に親しまれている。アンバとは「アワ」(阿波)の

訛りで、銚子市外川にも同名の神社があり同じルーツであると推察される。

また、地名に関しても同様な特徴を読み取れる。

千葉県、茨城県、栃木県内には、吉野川流域の地名との関係性を示唆する阿波町、橘町、神崎、坂東といった町名や、鷺、阿波、麻のつく神社、阿波や坂東、神崎のつく人の姓は、吉野川流域がオリジンであった可能性を示唆していると考えられる。

房総半島南部、旧館山市（南房総市）南部の阿波神社、洲崎神社、洲宮神社その少し北の下立松原（しもたてまつばら）神社、さらに北東、勝浦の遠見崎神社、匝瑺市の老尾神社、君津市の大原神社がある（図-3）。更に、銚子方面から利根川を遡上すると、旧小見川町（香取市）には阿麻勝神社が、印旛郡栄町には大鷲神社があるが、これらの神社は、いずれも忌部氏の祖神天太玉命あめのふとだまのみこと（天日鷲命あめのひわしのみこと）を祭っており、忌部ゆかりの神社であると推察される。

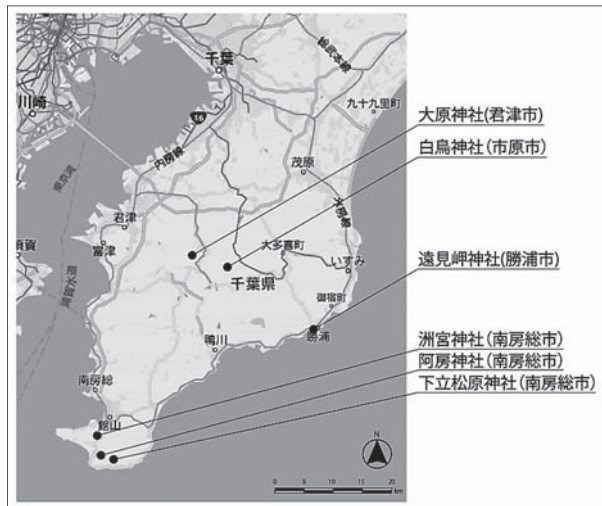


図-3 総半島南部の忌部ゆかりの神社

さらに、利根川から鬼怒川を遡上すると、茨城県阿波町の大杉神社、小山市の安房神社、益子町の日枝神社、栃木市の鷺宮神社も同様であるとされている（図-4）³⁾。

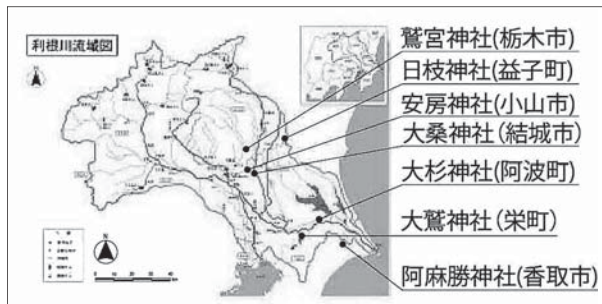


図-4 利根川流域の忌部氏ゆかりの神社

これらのことから、忌部氏は房総半島南端から半島を北上して茨城県、栃木県に勢力範囲を拡大していったとみることができる。同時に、これらの地域間が河川、水路、海路などで結ばれ、吉野川との交流のあったこともうかがえる。

4. 政争もたらした人の移動と交流

中世（鎌倉、室町時代）には、武士階級が台頭し、貴族と武家との政権を巡っての闘ぎ合い、あるいは武家同士の争いが多発するなか、覇権争いに敗れた武士や貴族が難を逃れて大きく移動した。関東武士の代表格である源頼朝は、政権獲得までに、伊豆、三浦、房総半島間を往来し、後に鎌倉に幕府を打ち立てたことは良く知られている（註7）。また、安房、上総、下総など房総半島における武家同士の覇権争いに敗れた武士たちの一部は、海路で吉野川流域に移住した者もいた。例えば、吉野川中流部にある安楽寺の住職は、代々千葉姓を名乗っているが、下総の豪族千葉氏の末裔が政争に敗れた後、伝を頼ってこの地で僧侶になったと伝えられている。

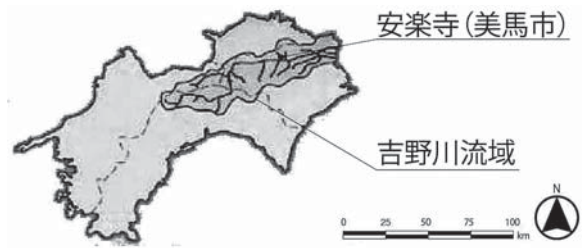


図-5 吉野川流域図

5. 江戸、近代の生活文化を支えた三河川交流

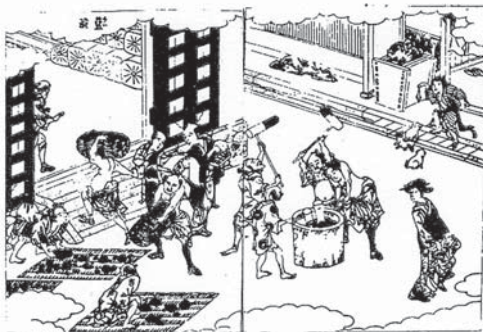
江戸時代になると、近畿、瀬戸内地方で木綿の栽培が盛んになり、生産量が増加すると、一般庶民の着物が麻から木綿へと変わっていった。これに伴って、当時の木綿の染料として、藍¹²⁾の需要が高まった。元禄年間（1688～1703）には、吉野川流域で藍の生産が盛んになり、藍染の原料である藍玉が吉野川流域から船で日本各地に運ばれた。当時最大のマーケットは100万都市の江戸であった。17世紀後半には、江戸幕府が行った利根川東遷事業によって利根川は旧常陸川と合流し、銚子と江戸が水路で繋がるようになった。また、利根川と大川（江戸川）とを結ぶ近道となる水路も整備され、銚子は北前舟をはじめとする江戸への物流拠点となった。四国地方で生産された木綿、藍は商品作物として黒潮に乗って大型船で江戸近郊の港まで運ばれ、川舟に積み替えて印旛沼、佐原から利根川を経由して銚子や房総方面へも運ばれていたとみられる。藍は、もともと西アジアやインド原産とされる植物（註8）であるが、早くから日本

に持ち込まれ、吉野川流域で栽培されるようになっていったようである。当初は貴族などの上層階級の衣装の染料あるいは医薬品として用いられていた。しかし、染料としての藍は科学的に不安定で保存が困難であったため、品質を落とさずに遠方に運ぶことが極めて困難なことが広範囲への普及を妨げていた。

江戸時代になると藍の葉を発酵させ球状に丸めた、いわゆる藍玉(註9)に加工することで長期の輸送、保存に耐えられるようになった(写真3)、(図-6)。そして、これが契機となり、藍玉は全国各地に広まっていった。藍玉を商う阿波の藍商の中からは豪商も出現した(写真4)。



写真3 藍を加工して造られた藍玉



阿波名所図会

図-6 江戸期の藍玉加工(原色染色大辞典)



写真4 美馬市脇町の吉田家住宅(美馬市観光課)

ところで、殺菌力を持つ藍で染めた着物は、美しい色合いと機能性(殺菌効果)が広く庶民に知られることとなり、染料としての藍は大都市から全国各地へ広がることとなった。藍は吉野川流域の特産品となり、江戸後期には豪商も出現した。藍問屋の中には、徳島市板野の三木家のように大坂や江戸に出店し、関東一円に藍を供給する大店も出現した。関東地域への藍の供給路として、利根川水系が重要な役割を果たしていたはずである。

藍玉は、吉野川流域から九州へも運ばれ、九州地方の織物産業の発展に貢献した。特に筑後川流域(図-7)では、江戸時代後期の化政時代(19世紀)にば、藍を用いた織物、久留米絣が開発され、明治にかけて、庶民の服飾デザインとして日本各地に広がっていった。



図-7 筑後川流域図

絣は農村の野良着や浴衣など、日常の衣服として幅広く利用されるようになり、デザインの多様化も進んだ(写真5)。

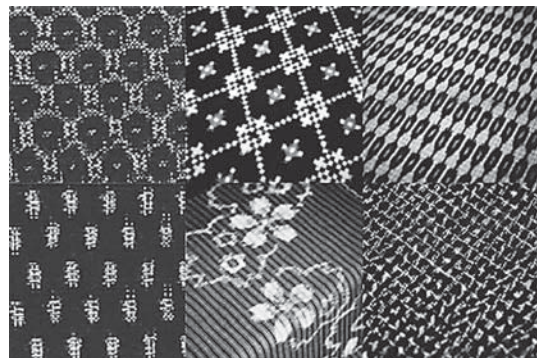


写真5 久留米絣の多様な文様

6. 黒潮は海の麻&シルクロードだった？

阿波忌部の房総半島進出に伴ってもたらされた桑の栽培と養蚕技術によって絹糸、絹織物の生産がこの地域で始まったとみられている。しかし安房地方では、貴族や

高級武士以外は絹の需要が少なく、主に租（税金）として収めていたようである。

その後、養蚕技術は徐々に房総半島を北上し、利根川、鬼怒川沿いに茨城、栃木、そして群馬へと広まっていったとみられる。室町時代になると京都での絹織物の需要が高まり、茨城県結城地方では絹織物が盛んになった。京都など他の地域からも技術者を呼び、上質な絹織物へと進化させた。その結果、結城紬ゆうきつむぎという光沢のある上質な絹織物として広く知られるところとなった。結城市には、忌部氏によってもたらされた養蚕を祭った大桑神社（註9）があり、地域のシンボルとなっている（写真6）。



写真6 大桑神社（結城市指定文化財）

7. 麻、木綿、絹、藍がつむいだ古代から近代にかけての吉野、筑後、利根川流域の文化交流

前述の久留米緋は、後に久留米藩の特産品として国内各地で販売されるようになった。また、久留米で開発された染色と織物技術は筑後川を下った後、黒潮に乗って、銚子へも伝えられたと見られる。一方、銚子の伝統工芸である銚子縮ちょうしちぢみは千葉県指定無形文化財として、また千葉県指定伝統工芸品に指定されている（写真7）。縮の染料として古くから阿波藍が使われてきた。そのためか銚子には、かつては藍問屋もあったという。

おそらく黒潮に乗って東京湾付近で川舟に積み替えて、利根川経由で銚子や東関東方面へ運ばれたか、あるいは房総半島を回って銚子経由で利根川水系を利用して運ばれたのであろうと思われる¹⁶⁾。銚子縮は、江戸から明治時代にかけて銚子や江戸の人々に愛され、一時は銚子の主要な産業の一つとなり、利根川経由で江戸などへ運ばれていたとみられる^{16) 18)}。しかし大正期に途絶えていたのを、昭和50年代に地元の商家で再興されて現在もその技術が受け継がれている。但し、銚子縮に用いる染料は、現在では合成藍に取って代わられているという。

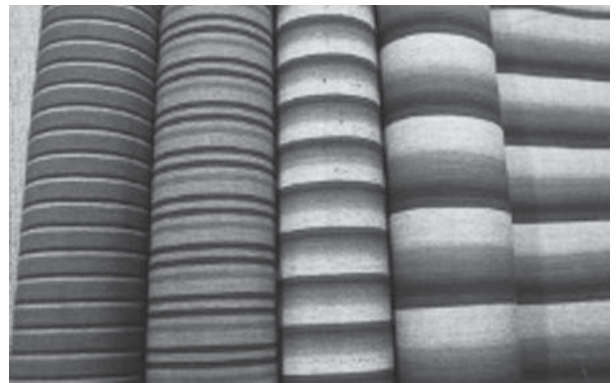


写真7 銚子縮ちょうしちぢみ

四国の吉野川流域から房総南部（安房地方）にもたらされた麻、木綿、絹、五穀は、忌部氏とともに房総半島を北上して半島一帯に拡がり、その後、香取の海（霞ヶ浦一帯）を北上して利根川、鬼怒川上流部へと伝播していったとみられる。麻を意味する「さ・ふさ」を受け継いだ地名である匝瑳郡、匝瑳市や上総、下総といった地域名や多数の忌部ゆかりの神社の存在は、房総半島を経由した利根川流域と吉野川流域の強く永い交流の歴史を物語っているといっても過言ではないであろう。また、筑後川と吉野川との関係性についても、筑後川流域の地名、人名に、吉野川流域の麻や藍、絹との関係性が推察されるものが多くみられる。これに関しては、更なる研究が待たれるものの、黒潮を経由して麻や絹、藍を介し古代から近・現代に至るまで長期にわたる交流があったことが、麻、絹の技術の伝播や藍の筑後川流域への普及の状況から推察される。即ち、麻や藍、紬や縮などの身近な素材や製品が、黒潮を介した三河川流域間の交流を可能にしたと考えて良いのではないだろうか。

8. 大嘗祭復活と利根川・吉野川の交流

先に述べた忌部氏と天皇家との歴史的なつながりが、吉野川と利根川との文化交流をもたらしたことを取上げる。古代から天皇が執り行う重要な祭礼として、豊穰を祝う新嘗祭にいなめさいと新しい天皇の即位式として執り行う大嘗祭だいじょうさいがある（註10）。室町時代後期以降、戦乱や天皇家の実権の縮小もあろうか、大嘗祭は行われなくなっていた。大嘗祭においては、王権を象徴する特別な礼服である鹿服を忌部氏が神事として作り、これを天皇に献上するという、天皇家と国家にとって大変重要な儀式であった。昭和天皇の時代からこれが復活される事となり、鹿服を古くから献上してきた、四国、徳島県美馬市の三木家（註11）が、約600年の時を経て再びこの役目を担うこととなった。ところが、その頃には、吉野川流域では既に麻の栽培は途絶えてしまっており麻の種子も無かった。しかし、利根川中流部の鹿沼市に麻の種子を持っている栽

培家がいることが判明し、そこから種子を譲り受けて麻を栽培し、籠服を献上することが出来たという。

これはまさに、麻が紡いだ吉野川と利根川の文化交流といっても過言ではないであろう。

9. 現代と近未来における三河川交流

平成18年(2005年)5月に、徳島県徳島市で全国各地から、忌部氏の後裔や忌部ゆかりの人々の集う「全国忌部サミット」(註12)が開催された。阿波から日本各地に移住し、定着した人々が、数百年から1千年以上にわたる時を経て一同に会し、共通の歴史、文化に関する情報を共有するという歴史的、且つ画期的な会となった。この会には、千葉県内の安房忌部や利根川・鬼怒川流域に定住した忌部の後裔たちも吉野川河畔に集った。

更に翌年の平成19年(2006年)には、千葉県館山市(現南房総市)でも、「いんべフェスティバル」が開催された。単にルーツをたどるだけでなく、古代から連続と続いて来た日本文化を深く掘り下げ、日本人のアイデンティティを洗い出すという意味がここにはありそうである。このように、人と川の歴史は、単に輸送や交通の面だけでなく洪水・氾濫や土砂災害など避けては通れない側面も多々ある。また、工業化や人口集中がもたらす環境汚染の問題も深刻である。その一方で、今後日本の抱える人口減少問題、水源や森林をどのように保全・管理していくかという問題にも直面している。さらには飲料や生活用水の供給源としても水量の確保や水資源の保全といった側面は地域を越えた国レベルの問題としても捉えていく必要がある。

水質保全や流域の生態系保全、水供給や防災など、多面的に水の問題を考えていくことの重要性が高まる中、平成26年4月に水循環基本法が制定、7月に施行された。水環境問題と、水循環を平行して効果的に進めていくための適切な方策を立て、実践していくことが求められている。

このような状況の中で、日本を代表する河川水系である利根川、吉野川、筑後川の3つの河川水系の流域住民相互の連携を良好は水循環、水環境の創出に結び付けていくかが今後の大きなテーマとなりつつあるのではないだろうか。

流域間の交流をより広く且つ深めていくための方策としては、以下の項目が挙げられる。

- ・人と川とがより身近になるような河川環境の整備を推進する。
- ・河川水系に関わる防災や、災害復興支援の仕組みを構築する
- ・河川水系を活用した物流システムを再構築する
- ・流域住民と関係自治体との交流や情報の共有
- ・住民による自発的な流域環境改善活動の公共による

る支援を強化する

- ・河川水系を船などの航行に適応したものに変わっていく(河川のデザインなど)
- ・生態系に配慮した水辺や川底などの河川環境創出を流域住民や専門家と協働して進める
- ・レクリエーション、観光的にも魅力のある水辺景観ならびに環境の創出を図る。
- ・流域相互の連携が円滑に行われるような情報交流システムの構築を図る

以上のうちどれも、一朝一夕に行える内容では無いが、例えば筑後川流域の住民が教育研究機関や自治体と共に永年にわたり進めてきた「筑後川まるごと博物館」²⁾の構想は、先進的な取り組みのモデルとなると考える。また、これらの中には、国や自治体が施策として取り組まなければ実現しないものも多い。しかし、身近なところから手を付けて行き、流域の市民団体が地域に根ざしながらその活動を活発化し、且つ連携を拡げるプロセスを、自治体や国がバックアップする、という仕組みが定常化していくことは、重要であると考えられる。

そうは言っても、現段階における利根・筑後・吉野河川交流は、関係する自治体によるバックアップがあるものの、基本的にはボランティアを中心とした組織であるため、活動資源も人材も限られている。このような状況の中でより良い河川水系との共存のあり方を模索していくことは、より息の長い、持続性のある活動へと展開していくための手がかりになるのではないだろうか。引き続き新たな資料を発掘し、それらを手がかりにより良い河川流域との関わり方について考えていきたい。

【註釈】

- 註1 利根川の水は大利根用水、東総用水、両総用水により、南房総の一部を除く、房総半島一帯に供給されている。利根川水系の水が導水され、且つ利用されている区域を「拡大流域圏」と定義した(20)。
- 註2 高山啓子(2010) 利根川拡大流域圏における市民環境保全団体の現状と課題 千葉科学大学紀要第3号 p161-175
- 註3 吉野川流域交流推進会議 日本三大河川(利根川、筑後川、吉野川)の兄弟縁組(平成24年9月)吉野川流域交流推進会議
<http://www.water.go.jp/honsya/honsya/pamphlet/kouhoushi/2012/pdf/1211-04.pdf>
2016-8-20
- 註4 倭国創生と阿波忌部 林博章(平成24年9月)
- 註5 古代、大和朝廷に仕えた職能集団
- 註6 忌部広成編(807年:大同2年)古語拾遺
- 註7 吾妻鏡 鎌倉時代後期

- 註8 藍:学名:*Polygonum Tinctorium Lour**Percaria Tinctoria*
タデ科イヌタデ属
一年生草本、西アジア原産 青色染料の原料
- 註9 藍玉:藍の葉を発酵・熟成させた染料である菜(すくも)
を突き固めて固形化したもの
- 註10 結城市小森の大桑神社、忌部氏と桑、養蚕にまつわる文
書がある。
- 註11 阿波忌部氏直系の一族、徳島県美馬市木屋平に三木家住
宅(国指定重要文化財)がある。
- 註12 第1回全国忌部サミットが徳島県吉野川市において開催
された。

参考文献

- 1) 吉野川流域交流推進会議
<http://www.water.go.jp/honsya/honsya/pamphlet/kouhoushi/2012/pdf/1211-04.pdf> 確認2016-08-20
- 2) 駄田正、夏広軍 流域連携とツーリズム 筑後川における
試み 比較文化年報 ISSN1341-4429 p27-40
- 3) 林博章(2006) 日本各地を開拓した安房忌部の足跡 安
房国編 多田印刷
- 4) 林博章(2011) 倭国創生と阿波忌部 多田印刷
- 5) 林博章(2013) オオゲツヒメと倭国創生 多田印刷 p161
- 6) 太田亮他編(1973) 姓氏家系大辞典第1巻 p133
P596-602、第3巻 p5751-5752 角川書店
- 7) 渡辺尚志編(2016) 生産・流通・消費の近世史 勉誠出版
- 8) 川添登(1984) 近世日本水運史の研究 雄山閣出版
- 9) 柚木学(1980) 近世海運史の研究 法政大学出版局
- 10) 杉原耕治(2015) 海の道 溪水社
- 11) 板倉寿郎他編 原色染色大辞典 昭和52年6月
淡交社 p2, 6,8,55,60, 86, 686,687,701,1130,
1090,1091,, 360,686,687,701,1130,1090,1091,
- 12) 牧野富太郎(2008) 新牧野日本植物図鑑 北龍館
- 13) 林博章(2007) 日本の建国と阿波忌部 坂東印刷
p53,295-297,
- 14) 林博章(2006) : 日本各地を開拓した阿波忌部の足跡
(安房国編)
- 15) 大津透、桜井英治他編集(2014) 岩波講座日本歴史 第
2巻 古代2 p299-302 岩波書店
- 16) 渡辺尚志編 生産・流通・消費の近世史 勉誠出版2016
年9月
国土交通省四国地方整備局河川国道事務所事務所編
http://www.skr.mlit.go.jp/tokushima/yoshinoriver/doc/01_soan.pdf 確認2016-08-20
若瀬博仁 江戸期における物流システム構築と都市の発
展衰退
http://www.ymf.or.jp/wp-content/themes/yamagata/images/56_7.pdf 確認 2016-8-20
- 17) 高山啓子(2008) 千葉科学大学紀要第1号

- p57-64 千葉科学大学
- 18) 高山啓子(2010) 千葉科学大学紀要第3号
p161-176 千葉科学大学
 - 19) 高山啓子(2016) 千葉科学大学紀要第9号
p139-144 千葉科学大学
 - 20) 筑後川流域の概況 国土交通省
<http://www.mlit.go.jp/common/000130660.pdf>
確認 2016-08-20

【図版】

- 図-1 国土交通省関東地方整備局利根川河川事務所
利根川流域地図より作成
- 図-2 Google地図を基に作成
- 図-3 Google地図を基に作成
- 図-4 国土交通省関東地方整備局利根川流域図を基に作成
- 図-5 国土交通省四国地方整備局吉野川流域図を基に作成
- 図-6 原色染色大辞典(12)より
- 図-7 国土交通省九州地方整備局筑後川流域図を基に作成
https://www.google.co.jp/search?q=%E7%AD%91%E5%BE%8C%E5%B7%9D%E6%B5%81%E5%9F%9F%E5%9B%B3&biw=1305&bih=590&tbm=isch&imgil=OHkZT2uHbIUUnNM%253A%253B2RetPdfY2VV7pM%253Bhttp%25253A%25252F%25252Fwww.mlit.go.jp%25252Friver%25252Ftoukei_chousa%25252Fkasen%25252Fjiten%25252Fnihon_kawa%25252F89092%25252F89092-1_ex.html&source=iu&pf=m&fir=OHkZT2uHbIUUnNM%253A%252C2RetPdfY2VV7pM%252C_&usg=__aR5NCBwCpYnIn7olRH_iHY21zYk%3D&dp_r=1&ved=0ahUKEwie6Jih-6zRAhUFopQKHfCAIEQyjcIMw&ei=vUJvWN6VN4XE0gT3hYKICA#imgrc=OHkZT2uHbIUUnNM%3A

【写真】

- (写真に関しては全て使用許諾を得ています。)
- 写真1 吉野川(国土交通省吉野川河川管理事務所)
 - 写真2 安房神社(南房総市観光課)
 - 写真3 藍玉エプロン工房ブルームーン
<http://apronbluemoon.jugem.jp/?day=20081111>
確認2016-08-20
 - 写真4 美馬市脇町の吉田家(美馬市観光課)
 - 写真5 久留米餅(久留米市観光課)
http://www.kurume-hotomeki.jp/special/kurume_story08.html 確認2016-09-30
 - 写真6 大桑神社(結城市観光課)
 - 写真7 銚子縮 銚子市観光協会
<http://www.choshikanko.com/spot/00079.html>
確認2016-9-20